

〈彼〉の声を聞く、〈私〉のなかで

— 港道隆さんの仕事

鶴岡 哲

最初に、港道隆さんと私、あるいは私たちの、出会いの経緯についてお話させていただきます。一九八四年秋、パリで、私たちは出会いました。この年の留学生たちのあいだで、港道さんはただひとり、すでにご著書のある研究者でした。廣松渉先生との共著、岩波書店刊の『メルロ＝ポンティ』を、フランス思想研究を志して渡仏した同世代の学生たちはみな、その見事な論の運びに感嘆し、畏怖さえ覚えつつ読んでいました。この本には著者近影が添えられていましたので、私たちは港道さんのお顔まで、あらかじめ知っていたのです。

思えば、これはちよつと不思議な、非対称的關係性でした。私は、港道さん自身がまだ知らなかった、すでに港道さんを知っている、そして港道さんから学んでもいた人々のうちのひとりでした。ジャック・デリダは『友愛のポリティクス』で、フランス一六世紀の思想家、モンテーニュとラ・ボエシの交友

に触れて、非常に印象的な、次のような言葉を残しています。

「名のおかげで、友愛は友愛より前に始まる、名のおかげで、友愛は友愛の後に生き残る、つねに友愛は、おのれの後に生き残ることによって始まる。」（『友愛のポリティクス』二、一五〇頁。訳文変更）

モンテーニュとラ・ボエシは、実際に会おうより前に、すでにおたがいの名を知っていました。おたがいの評判に触れながら、のちにモンテーニュが美しく謳い揚げる友愛の予感を抱いていました。私たちの状況は、港道さんおひとりに対して私たちは多数であり、港道さんのお名前が知られていたのに対し私たちの名は知られていなかったのですから、この伝説的な友愛の始まりとは、まったく異なるものでした。それにもかかわらず、私たちの交友が、「名のおかげで」、出会い以前から始まっていたことは疑いありません。なぜなら、やがて親しくお付き合いになることになってからも、「港道隆」という美しい名は、交友が始まる前の輝きを、私のなかで、けっして失うことはなかったからです。

それにしても、これほど早い別れが待っていないとは、まったく予期していませんでした。あまりのことに、今もなお、港道さんが他界されたことを、心の底から信じていることができませ

ん。私のなかで響く港道さんの、忘れられない言葉の数々は、二〇一五年三月五日という日付の前も後も、まったく変わらないう声で、私に語りかけてきます。

港道さんから私は、数え切れないほど多くのことを教えていただきました。二年ほどの年齢の違いでしたが、面識を得て、やがて一緒に仕事をするようになるにつれて、港道さんは、私にとって、私たちにあって、やがて兄のような存在になっていきました。

私の港道さんとの交友は、後にお話するように、ジャック・デリダと私たちの交流と、密接にかかわりながら深まってきました。しかし、港道さんのお仕事の幅は大変広く、デリダに關連する領域に限定して語ることは到底できません。あえて整理するならば、港道さんのお仕事は、第一に、メルロー・ポンテ、レヴィナスなど、フランス現象学の系譜に連なる哲学者、思想家たちの個別研究、第二に、倫理、言語、精神分析、労働など、明確な主題のもとに、厳密に、犀利に、繊細に掘り下げられた哲学的探求の数々、第三に、デリダ、コフマンなど、港道さんが深く親炙された思想家たちの著作の見事な翻訳に分けて考えることができるでしょう。

第一のカテゴリーに入るお仕事として、ここでは一九九七年刊の『レヴィナス』を取り上げたいと思います。現在日本では

エマニユエル・レヴィナスの研究は大変な隆盛をしていますが、港道さんのこの本は、次世代以降の研究の広がりを用意したと同時に、入門書という枠に収まらない、すぐれた個別研究として、いわば古典的地位を得ています。そしてそのことには、パリ第一大学に提出された学位論文の内容が、この本に豊かに流れ込んでいるといって、非常に明確な理由があります。この論文執筆の時期に、留学先で、そのモチーフについてたびたびお話を聞いていた私には、改めて読み直しながら、いくども追憶の深みに落ちていく時間がありました。

著書『レヴィナス』における港道さんの論の進め方は、なによりも、慎重で、緻密で、けっして先を急がない、みずから問う問いの数を惜しまない、哲学的思索の足取りを特徴としています。とりわけ「他者の顔」という、もつとも重要な論点をレヴィナスの思索に密着して掘り下げていく部分に、港道さんの研究者としての特質が、如実に現れています。港道さんはまず、レヴィナスの思考の歩みにおいて、「絶対的に他なるもの」という表現が、死と他者という、異なる主題に共通に用いられていることを強調します。この二つの構造の形式的な類似性を確認したうえで、どのような点で差異が語りうるようになるのか、一歩一歩、必要な検証の手続きをひとつも省略することなく論を進めていきます。しかもそのとき、もつとも困難な問いからけっして眼を離さず、むしろそれらの問いの方に、ほとん

ど引き寄せられるように、向かっていくのです。

もつとも困難な問いとは、例えば次のようなものです。レイナスは、△私▽が苦痛のなかから他者に向けて発する救いを求める叫びと、他者はその顔の裸性において発してくる「殺すなかれ」という呼びかけを、どのような関係において考えていたのか？ レイナスの考えをつきつめた場合、△私▽を苦しめる他者、拷問する他者にさえ、顔があることになるのか？ あるいは、「殺すなかれ」と呼びかけてくる他者の顔の公現 (epiphane) によって、戦争と平和の可能性が同時に開かれる

というレイナスのテーゼは、どのように理解されるべきなのか？ あらゆる自衛の概念の核心にある正当防衛の論理の悪循環を、どうしたら断ち切ることができるのか？

△私▽と他者の関係が、レイナスが「関係なき関係」と呼ぶものに、ついに転倒し次のような決定的な確認に至るまで、数十頁にわたる読解の作業が、忍耐強く続きます。

「他者の顔が、△私▽に暴力を放棄するように迫るとしても、それは従って、対抗暴力の脅威によってではない。他者の顔は、呼びかけの力を、△私▽に対する死の脅迫からではなく、その無力から、その苦痛から、その死から汲み出してくるのだ——他者の可死性としての顔。ここですべてが逆転する。△私▽の死の場所に他者が現れるという、戦争にいたる△私▽の死と他者

との関係を、われわれはもはや維持しえないのだ。顔が直面する度ごとに△私▽は、現象として知覚することなしにも、他者を死に導く悲惨に、△私▽が強要したのではない悲惨に感応しないことはできない。△私▽の死が絶対的な他者であり、その延長上に他者が現れるとしても、その顔は、さらに深いレイエルで、絶対的に他なるものである。さらには、他者が△私▽の死の場所に現れる代わりに、今や△私▽こそが、他者の死の場所を占めているのである。」(『レイナス』、一五〇頁)

哲学という営為の厳しき、難しきが、これ以上に強く感じられる局面があるでしょうか。△私▽の死の可能性を凝視しつつ、それよりも「深いレイエル」の「他者性」を、探求し、発見し、表明せずに済ますことのできない、生の彼方の真理に向かう衝動に憑かれた精神の姿が、ここに見事に描き出されているのではないのでしょうか。レイナスの思考の歩みに寄り添いつつ、ここには港道隆さん自身の思想的格闘が、声の微妙な重なりを通して、範例的なたちで証されているように思えてなりません。

「死・暴力・他者」という表題を持つこの長い章の最後に、港道さんは、拷問者に顔があるかというさきほどの問いに立ち返り、レイナス自身の、あるインタビューのなかの発言を引用されています。

「博士論文の口頭試問のなかで、私の仕事を注釈する若い日本人に、ジャン・トゥサン・ドゥサンティが、私が顔という言葉で理解しているものをSS（「ナチス親衛隊―引用者注」）はもっているのか、と尋ねました。当惑させる問いですが、私の考えでは、肯定形の答えを呼び招きます。その都度、苦しみに満ちた肯定形の答え！」（同書、一六七頁）

この「若い日本人」とは、レヴィナスの哲学を主題とした博士論文を、フランスで初めて提出して学位を授与された日本人である、港道隆さん自身のことであることは言うまでもありません。私はこの口頭試問を傍聴していました。ドゥサンティがこの質問をしたときの場面に立ち会っていました。そして港道さんが、この質問に、言わばレヴィナスに先立って、肯定形で答えていたことを、その後ろ姿の背中表情を、手の仕草を、今もありありと思い出すことができます。

「その都度、苦しみに満ちた肯定形の答え！」

レヴィナス特有の感嘆符で終るこの文を引用されたとき、港道さんの心中にどんな思念、どんな記憶、どんな情動が働いていたか、みなさんとともに、思いを馳せたいと思います。

このように、困難な思想的問いに敢然と取り組む、すでに独創的な探求者の相貌を備えた気鋭の哲学者として、港道隆さんは私たちの前に現れました。しかし、そう言っただけでは、港道さんという存在の、私たちにとつての、この時代の面影の半面を伝えたことにしかならないでしょう。港道さんは同時に、ときに剽軽な、ときに深刻な、いずれにしても非常に豊かな表情にあふれた、その仕草のひとつひとつに忘れられない彼らしさを湛えた、文字通り誰にも似ていない、特異な個性でもありました。これからすこしばかり、私たちの留学期の交友の経緯についてお話をさせていただきます。

私たちが出会ったのは、おそらく、一九八四年一月の初め、エコール・ノルマル・シュペリユールのデュサンヌ教室で開講された、ジャック・デリダのセミネールの初回のときではなかったかと思われます。「哲学の国籍と哲学的ナシヨナリズム」という表題を掲げたこのセミネールは、私たちをたちまち深く魅了しました。円熟期に入りつつあった当時五四歳のデリダは、エコール・ノルマル（高等師範学校）から社会科学高等研究院に移籍したばかりであり、また、彼が創設に尽力した国際哲学コレージュの初代ディレクターでもありました。フィヒテ、ルナン、ハイデガー、ヴェイトゲンシュタイン、アーレント、アドルノなどのテクストを取り上げて、哲学の民族的帰属という問題設定がはらむ逆説の数々を、それは見事に分析してみせてく

れました。この時期以降、セミネールの後、日本人留学生たちは、エコール・ノルマルの近くのムフタル街で、夕食をともにしながら当日学んだことを振り返り、議論を深めていくことがならわしになっていきました。その中心には、つねに、港道隆さんがいたのです。

港道さんは私たちのなかで、すでに著書があった唯一の人だったばかりではありません。一九七五年にすでに最初の留学を経験していて、一九七〇年代のフランスの人文系の学問世界の空気に触れていた唯一の人でもありました。この最初の留学については、ニコラ・アブラハムとマリア・トロークの共著であり、デリダが極度に難解な序文を寄せそれを港道さんが翻訳された、『狼男の言語標本』の日本語版のあとがきに、少しだけ触れられています。当時港道さんは、すでにデリダの講義出席していたばかりでなく、コレージュ・ド・フランスにおけるミシェル・フーコーの講義も、かかさず聴講されていました。その時期の見聞を、ときどき港道さんは、ユーモアたっぷり、私たちに話してくれました。

フランコ將軍が世を去り、スペインの長い独裁時代が終わりを告げた翌日、フーコーは、いつものくせで掌を擦り合わせながら、微笑をたたえて、黙ったまま、しばらく聴衆を見回したあと、「C'est une petite fête」——「ちょっとしたお祝いですね」と言って爆笑を誘ったそうです。その場面を、港道さんの演技

を通して、私たちはありありと思い描くことができました。

デリダ・ゼミ・グループは、やがて勉強会を持つようになりました。『カイエ・ド・レルヌ』誌のハイデガー特集号に掲載されたデリダの論文、「存在論的差異、性的差異」が、最初のテクストだったと記憶しています。さらにこの学習会は、ある必然性にしたがって、翻訳の共同作業のアトリエに変貌していきました。一九七五年、デリダが『ディグラフ』誌に発表した詩人ジャン・リスタとの対話、「鉤括弧のなかで」および「*ou le faux-bond*」は、デリダが言うところの「言葉遊び」(jeu de mots)ならぬ「言葉の火」(feu de mots)に満ちた特異な対話であるとともに、当時日本では知られていなかった七〇年代半ばの彼の政治的スタンスを知るうえでも格好の文献でした。

研究者としては明らかに先行する存在だった港道さんも、翻訳者としてはおそらく、私たちとともに、この時期に将来の見事な訳業の土台を築かれたのではないかと想像しています。難解極まりないこの二つの対話録を、増田一夫さん、松葉祥一さん、荻野文隆さん、そして港道さんと私の五人で、読み合わせ、訳文を持ち寄り、たがいに検討を加えながら、翻訳を仕上げていった日々のことは忘れることができません。デリダの特異な語法のあれこれのように訳すべきか、今日でも私は、多くの場合、このときの集団作業のなかで、港道さんが提案された解決に従っています。遺産相続は、すでに始まっていたのです。

この作業の成果は、港道さんのご尽力で、『現代思想』誌に掲載されることになりました。

しかし、私たちの作業は難渋を極め、どれほど知恵を絞っても、いくつも不明の点が残りました。私たちが途方に暮れていると、港道さんは途方もない提案をされました。デリダ自身に聞いてみようというのです。驚いたことにデリダは港道さんの要請を快く受け入れ、ホテルのロビーで、私たちの質問に、身振り手振りを交えて、とても丁寧に答えてくれました。

このときの出会いが縁になって、港道隆さんを中心とする日本人留学生グループとデリダのあいだに、ひとつの接点が形成されました。翻訳の共同作業の延長上で、増田一夫さん、港道さん、私の三人で、折口信夫の翻訳論を題材に、デリダのセミナーで発表を行ったのもその頃のことです。やがて港道さんは、デリダ夫妻を自宅に招待するという、さらに途方もない計画を実行に移しました。当時港道さんは、お連れ合いの澄江さんと、バスターユ近くのアパートマンにお住まいでした。エレベーターのない五階まで、五〇代のデリダ夫妻が果たして昇つてこれるかどうか―若かかった私たちは、そんな心配までしていました。一九八六年のことです。そのうちデリダは、今度私たちを、パリ南郊外リス・オランジスの自宅に招待してくれるようになりました。

ここで順番を転倒して、先に港道さんのお仕事のうち、第三のカテゴリに分類した翻訳について語りたいと思います。

『精神について』と『アポリア』は、デリダのハイデガー論の白眉というべき著作であり、港道さんという最高の訳者を得て、日本語の哲学翻訳の歴史上画期的な業績として、今、私たちの前にあります。ここではまた、港道隆さんのフランス留学期のもうひとりの師、サラ・コフマンの代表的著作のひとつであり、神山（港道）すみ江さん、中村典子さんとの共訳書である『人はなぜ笑うのか？』が、港道さんのお仕事のなかで持つ重要な位置についても、一言言及したいと思います。

一九八〇年代後半、デリダのセミナーでもっとも深刻に、熾烈に論じられたテーマのひとつは、一九八七年、ヴィクトール・フアリアスの『ハイデガーとナチズム』の刊行とともに始まった、ハイデガーのナチズムへの加担をめぐる問題でした。『精神について』は、このフアリアスの著作の刊行以前に行われたコロック『ハイデガー―開かれた問いの数々』におけるデリダの講演録です。港道さんは、レヴィナスも臨席していたこのコロックに立ち会っていました。ハイデガーが『存在と時間』以来、形而上学的概念として回避の対象にしていたはずの「精神」(Geist)という言葉が、フライブルク大学総長就任演説の「ドイツ大学の自己主張」において、括弧をかなぐり捨てて用いられたという出来事の指摘に始まるデリダの考察が、文

字通り目くるめくばかりの縦横な展開を見せたことを、港道さんは、当日不在だった私に、非常な熱をこめて語ってくれました。

『精神について』が人文書院から、港道隆訳で翻訳出版されたのは一九九〇年、平凡社ライブラリーの一冊として再版されたのは二〇〇九年のことでした。港道さんの翻訳書にはどれも、きわめて密度の高い、すでにしてすぐれた翻訳論でもあるあとがきが、postscriptum という表題のもとに付されています。その詳細に触れることは、残念ながらここではできません。港道さんが『精神について』新版のあとがきに記された言葉に、いまは耳を傾けたいと思います。

「二十年余りになる。この講演が行われたハイデッガー・コロク当時のことは今でも鮮明に覚えている。そこには、ジルベール・カーン、コスタス・アクセロス、フィリップ・ラクーラバルト、ミゲル・アーバンスール……数多くの思想家と研究者たちが参加し、我が師サラ・コフマンも出席していた。今日では多くの人々が亡くなっている……当手を振り返るとき、こうした優れた人々から刺激を受け、考えることを彼の地で学んだ日々は、私にとって本当に幸せな時間であった。デリダの講演は私にとって、そうした時間の極みに位置するものであった。その痕跡は、人文書院版の「Postscriptum」に今も認める

ことができる。間もなくフランスで再燃したハイデッガー・ナチ論争をも睨みながら、一九八七年、日本への帰路にあった飛行機の中で改めてこの書を通読した私は、初めて自らの身体を通してこの書を翻訳したいという願望を抱いた。懐かしむわけではない。それ以来、さらにはそれに先立つフランス滞在以来、自己陶冶を続けてきたつもりである。その結果がどれほどのものであるにせよ……。」

「(…) 翻訳は常に危険と裏腹だ。翻訳は文化の豊かさに寄与することもあれば、その足を引っ張ることもある。功罪の危うい活動である。そこに、我有化の欲望を持ち込むなら、デリダのテキストそのものを読んでいないという結果を排出するしかない。自ら署名をしたい欲望に突き動かされるのであれば、それ自体を私は否定しないが、そのことがデリダの問いかけを逸する確率を高くする。「われわれ」(とは?) もまた翻訳するたびに、翻訳の政治性を改めて考えることを強いられる。「私はまだ読まれていないのではないか」という、不遜との印象を与えかねないデリダ最後のインタヴューでの発言も改めて真摯に受け取りたいと思っている。沈黙と「饒舌」との間に介在する沈黙の中で。」(『精神について』、三二六―三二八頁)

『狼男の言語標本』の翻訳出版が、甲南大学の同僚の方々と、きわめて豊穡な共同作業のひとつの到達点として実を結ん

だように、港道さんのお仕事のなかで、精神分析への関心がいっそう深まっていったのは、甲南大学で教鞭を取られるようになってからだったでしょう。とはいえ、最初の留学時に港道さんは、のちに「Speuler sur Freud」〔投機＝思弁する—フロイトに〕という表題で発表されることになる、フロイトの「快原則の彼岸」を扱ったデリダの講義に出席していましたし、二回目の留学時にも、私たちのあいだでは、ジャック・ラカン
の分析理論とデリダによる精神分析への脱構築的介入の関係が、頻繁に話題になっていました。そして、港道さんの博士論文の指導教員だったサラ・コフマンが、デリダとはまた別の、フェミニズムと哲学の鋭い緊張のなかで成立した、いくつもの卓抜なフロイト論の著者であったことも、港道さんを精神分析に向かわせた、もうひとつの、大切な道だったと思われれます。

『ひとはなぜ笑うのか?』におけるコフマンの議論は大変錯綜していて、ここでご紹介することは到底できません。港道さんは、ユダヤ系の思想家の特異な「笑い」に、どこか惹かれるところがあつたようです。フロイトの一九〇五年の著作、『機知—その無意識との関係』は、ご存知のように、ユダヤ民衆の笑話から、主な事例を集めています。コフマンが読み取るのは、フロイトが自分自身を、これらの笑話のなかにひそかに書き込む微妙な身ぶりです。港道さんは、翻訳のあとがきで、次のようにまとめておられます。

「コフマンは執拗に、ブロイアー／フロイト／チェチーリエ、二人の成金の肖像に対する「それでは救世主はどこに?」、分娩の苦痛に耐えられなくなった男爵夫人／夫／医者
の三角形の構造を追求して、フロイト自身が、この三角形の中を揺れ動く様を描き出す。コフマンの分析はこうして、女性（の去勢）—ユダヤ人（の去勢）—普遍的男性—人間（の去勢不安）という男性に根強いフェティシズムを掘り起こしている。（・・・）コフマンもまた「笑うユダヤ人」であつた。しかし、自分の父を始めとして、ナチスによって虐殺されたユダヤ人の運命に深く傷つき、自らのユダヤ性を問い続けた思想家であつた。苛酷な運命を背負い、その運命ゆえに病弱な身体を引き摺りながらも、強い闘争心をもって女性として思想的に闘い続けた。（・・・）」

（『ひとはなぜ笑うのか?』、一三四—一三五頁）

この前の引用のなかで、港道さんが「我が師」と呼んでいたのは、デリダではなく、コフマンだつたことをご記憶のことと思います。そこには制度上の論文執筆指導教員だつたという事実以上の、生き、考え、書くことが日々の闘争そのものだった、その闘争の果てに自ら命を断つた女性哲学者に対する、親しく接する時間を持った港道さんの、限らない感嘆と、尊敬と、哀惜の思いがこめられていることが感じられます。

港道さんと私、私たちの出会いの文脈のために、港道さんのお仕事とフランス思想のかかわりを、やや過度に強調しすぎたのではないかと危惧しています。港道さんは、最初の著作が、典型的な国内派哲学者だった廣松渉先生との共著であることから分かるように、日本固有の文脈を負った思想の歴史にも、またドイツ観念論の歴史にも通暁していました。帰国後間もなく発表された目の覚めるような和辻哲郎論、そしてもうひとりの日本人の師であった今村仁司先生から相続された労働をめぐる独創的な考察などに、こうした教養は豊かに生かされています。

港道さんは一九八九年、甲南大学に着任されました。関西で学生時代を送った私が東京で仕事をみつけたのと入れ替わるように、東京外国語大学出身の港道さんが関西の大学で教鞭を取ることになり、それまで東日本でしか生活した経験がなかった港道さんは、最初の頃は、やや戸惑われている様子でした。しかし、やがて新天地でのお仕事にひとときわ意欲を燃やすようになり、勝手の違う文化圏での生活や仕事について、「まるで留学生活の続きのようだ」と、明るい顔で話されるようになりました。

一九九五年一月一七日に起きた阪神淡路大震災が、港道さんにとっても、非常に苛酷な経験だったことは、あらためて言うまでもありません。著書『レヴィナス』や『アポリア』『ひと

はなぜ笑うのか?』の翻訳のあとがきに、この災厄の痕跡ははつきり記録されています。

この出来事ののち、とりわけ二〇〇〇年代に入ってから、港道さんのお仕事に、政治的文脈に直接にかかわる主題系が、より頻繁に取り上げられるようになったという印象を、私は持っています。二〇〇六年の編著『心と身体の世界化』はそのもつとも目立つ指標であり、この本に収められたご自身の論文「肯定と抵抗―序説」では、ジャン＝リュック・ナンシーによる「キリスト教の脱構築」とデリダの作業の微妙な差異の分析を通して、グローバル化への抵抗の場所を、例えば日本国憲法九条のなかに探ろうとされました。それに先立つ二〇〇二年七月、スリジイ＝ラ＝サルでデリダを囲んで行われた最後のコロック「来たるべき民主主義」では、港道さんは、「*Divinité déniée et avenir d'une démocratie*」（否定された神格と或る民主主義国の将来）と題して、和辻哲郎の戦中と戦後の天皇論を取り上げ、日本の戦後民主主義と天皇制の関係を、近代の政治的主権の歴史におけるきわめて特異な事例として詳細に論じられました。また、二〇〇七年の「世界ラテン化におけるハイデッガーとデリダ」では、世紀転換期の「世界のヨーロッパ化」過程を、証言の問題を手がかりに綿密に分析されました。そして二〇〇九年の「和解から赦しへ」には、この時期のご研究の、ひとつの集大成が見出されるのではないかと思われま

この長大な論文は、甲南大学人文科学研究所の共同研究のなかでその骨格が形成されるとともに、赦しという出来事のはらむアポリアの諸相を、デリダの議論に即して記述しながら、その鋭利な定式化において、まぎれもなく港道さん固有の、孤獨な、ほとんど戦慄さえ覚えさせる、思考のドキュメントともなっています。「赦すこと」は、そして「赦しを乞うこと」は、果たして「赦されること」なのかこの問いは、この論文のなかで、単なる論理的パラドクスとしてではなく、絶望的なアポリアの経験として生々しく論じられていて、ある種異様な力で読む者を打ちます。

「第三者の目に見える審級である法の基準によって振り分けられた加害者・被害者の区別から出発する和解とは異なり、和解プロセスに織り込まれながらそこから常にこぼれ落ちる「赦しの問い」は、最終的に加害者／被害者の区別を決定不可能にする。同一化が不可避なこのレヴェルでは、加害・被害の立場は常に既に反転しているのだ。暴力の世代間伝播といった経験的な、時間差を含んだ現象ではなく、原理的に加害・被害の立場は、常に既に反転してしまっているし、反転し続けているのだ。これからも。原理的に常に既に。この事態はしかし、「誰でも同じだから、みんな諦めよう」とのメッセージではない。（・・・）原因結果を特定しえない連鎖の中で恨みが残り、忘却

と諦念が起こり、しかし「赦し」が問われ続ける。「残念」なのか「無念」なのか、何れにせよ「念」は残る。」（「和解から赦しへ」、PDF版、三三頁）

「赦し」の問いが、このように、「念」として、生死さえ超えること。この少し前で、港道さんはそのように明言し、「もちろんこれはデリダの定式ではない」と、謎めいた、断固とした一言を付け加えています。△港道隆▽を読むという経験は、私にとって、これまでも、これからも、この「念」の生き延びのなかに身を置くこと、港道さんが、レヴィナス、デリダ、コフマンの歩みに添いながら、同時に絶対的な孤獨のなかで、「存在者の有限性の帰結」として考えたことを、自分自身の生で場当たり直すことにほかなりません。

港道さんは、哲学者の人生が幸福でありうるかという問いに、強い関心を抱いていました。直接デリダに訊ねたとは想像しにくいのですが、ある日、この問いに対する彼の答えは否定形だったと伝えてくれたことがあります。私的な生活では素晴らしき伴侶に恵まれ、職場においても優秀な同僚の方々に囲まれていた港道さんは、とても幸福な生涯を送られたと思います。哲学者としては、思考する者の不幸を恐れず、問いの深淵に敢然と降りていくことを、けっして止めない人でした。

私たちは港道隆さんを喪ってしまいました。その喪失の大き

さは計り知れません。尽きない悲しみのなかで、港道さんから
学び続ける志を、みなさんと分かちあつていきたいと思ひます。
港道さん、有り難う。

二〇一五年九月二二日 甲南大学にて

鵜飼 哲

(うかい・さとし／フランス文学・思想)